

後書

「ウチら、どんな夫婦になるんやろ……ね」

「えっ!？」

驚きのあまり言葉を失う。目を開けて満面の笑みを復活させる美英子に何とか答える。

「臭い夫婦や」

「イヤや。そんなん」

「せやな……せや! 俺も大事なことを忘れてた……」

「何を」

今、告白しておかないと後悔すると意を決して口を開くが、言い出せずにごまかす。

「俺、まだ学生や。夜間の」

当然という表情で美英子が首を傾げる。

「年下やし、頼りないし、蓄えもない。生活でけへんで……」

「やっぱり年下やったんや」

「ごめん。それに……」

今度はと思うが言い出せない。

後書

「……それに無職や」

「えー」

美英子は軽く驚いた振りをするだけでじつと俺を見つめる。ついに決心する。

「俺……夏子を……にん（しん）……」
すかさず美英子は俺の頬を強く突く。

「もう、エエやん」

意外な反応に俺は戸惑う。もう一度ハッキリ言おうとすると美英子の方がハッキリ言う。

「つべこべ言わず、お姉ちゃんに追^{ツイ}といで」

「お姉ちゃん？」

美英子はもう一方の指で自分の片笑窪を押さえる。

「おばちゃんと違うで」

そして、大き目の黒っぽいアメを取り出すと包みを剥がして口に含む。

「昆布巻きのアメちゃんや。半分こ、だけへんから、全部あげる」

美英子が強引にキスしてきてアメを押し込む。急に口を塞がれたから息苦しい。

「マモルには生き抜く知恵と力があるやんか」

俺は舌でアメを片方の頬に押し込みながら声を出す。

「そんなん、持ってない」

後書

「何、言うてんの！」

美英子が俺の胸を両手で強く押す。

「婿入り道具、全部この中に入ってるやん！」

——えっ！ 俺、もらわれるんや！